

ゴボトの一夜

ジャック・ロンドン 作
森 孝晴・劉 鵬 訳

I

ゴボトという島で、乗って来たスクーターから商人たちが降りて、農園主たちも同じ遠いところにある海岸から漂って来て、彼らは靴と長いズボンを着き、このようなやり方で文明社会を装う。ゴボト島では、郵便物も届くし、サインひとつで支払うこともできるし、そして、珍しいことだったが最近五週間以内の新聞にも手に入れる。この小さな島は、サンゴ礁に囲まれているので、船が安全に停泊場所を提供され、蒸気船の停泊港になっている、それで、各地に散在している貨物を配送するサービスを提供する集散地となっている。

ゴボトでの暮らし方は激動的、不健康、ハラハラドキドキなもので、そして、この世の中の他の所と比べると、この島の大きさから言うならどこよりも極めて大酒を飲む人が多いと言い切れる。グヴツは、ゴボトの人達はソロモンの人々より飲み続けていると主張している。ゴボトの人々はこのことを否定しない。かつてこの島がまだ一つの国だった時、ゴボトの編年史の中にも彼らは休みなく飲み続けるものと記載されている。この島の輸入統計も指摘すべきで、それは、かなり大きなパーセントを占める出資が純度の高い酒の消費で消えていることを表している。その理由をグヴツは、ゴボトには大きなビジネスがある、つまり大量の訪問者がいるからだと釈明している。ゴボトでは訪問者のほうが島の人口より多いし、彼らは島民より飲みたがるのだ、と言い返している。この討論は終わりなく続いている、なぜならば、この問題を解決する前に論争をする人たちも死んでしまったからだ。

ゴボトは決して大きくない。島の直径はたった半マイルしかない、島にはイギリス海軍の石炭小屋が設置されていて〔そこに何トンもの石炭が20年以上放置されていた〕、別の小屋には黒人労働者が何人か住んでいて、もうひとつの大きな建物は店兼倉庫となり、その屋根は鉄でおおわれている。バンガローには、支配人と助手二人が住んでいて、彼らは島に住むわずかな白人だった。島の人はいつも平均三人に一人ほどが熱病で倒れている。ゴボトで仕事をするのはとても困難だ。投資家にはおもてなし的なサービスを提供するという会社のルールがあり、会社の入れ替えはあったものの、支配人と助手の仕事、つまり投資家に対するサービスは相変わらず続いている。時を経て、商人たちと人員募集船（奴隷運送船）のオーナーたちが遠いところから喉が渴いている船員を連れて島に辿り着いた。農園主も同じぐらいの距離から同じぐらい喉が渴いている体を持って来た。彼らに伴っているのは豪快な飲酒だ。ゴボトは酒宴のメッカで、彼らは自分たちのスクーターや農園に戻る時だけ体を休ませることができる。

中には丈夫でない人達もあり、彼らは六か月も休養してから、やっともう一回飲みに戻る。し

かし、支配人と助手にはこういった休みがない。そこは彼らの居場所だから。季節風や東南貿易風に乗って来たスクナーらは毎週のようにここで錨を下ろし、貨物のコブラやアイボリー・ナッツや真珠貝殻やタイマイ、そして、酒を飲む人を連れてくるのだ。

ゴボトでの仕事は大変困難だ。だから、他のステーションより2倍の給料をもらえるのであり、そして、だから、会社はこの特別なステーションに大胆かつ勇敢な人しか選ばないのだ。それでも、彼らは、島で一年か、または多くの場合は一年も続かなくて、体もかなり弱ってオーストラリアに送還されるか、死んでしまってそのまま海岸に埋葬されるかの運命だ。ジョーニー・バセットはその中の伝説的ヒーローだ。彼は滞在記録を破った。彼は為替の送金係だった、非凡な体を持っていて、死ぬまで島で七年も住み続けた。彼は死ぬ直前に正式に書記をお願いをし、書記は彼の指示に従ってその死体をラム酒の樽に漬け込んで、〔彼らは自分の給料で払った〕それを船でイギリスにいる家族に送った。

しかしながら、ゴボトの人々は紳士になることに心掛けた。そのことと言えば、何か勘違いしてはいたけれども、彼らは紳士だったし、ずっと紳士だった。それは、ゴボトには偉大な暗黙のルールがあるからだ。それは、訪問者たちは必ず長いズボンと靴を履かなければならないというルールだ。腰布、ラバーラバ、生足は許されない。最も野蛮な奴隷商人ジェンソン船長は古いオランダ移民の血統を持つニューヨーク市民だったけれども、押し入るように現れた彼は、腰布と肌着しか着ていなかった。そして、二つのベルトにリボルバーと鞘付き刀を差していた。言うまでもなく彼は砂浜の所で止められた。ちょうどその時はジョーニー・バセットが支配人で、彼は礼儀作法のことについてきちんと維持していた。ジェンソン船長は彼の救命艇の上に立って、彼のスクナーの中には長いズボンがないと言い続けた。また、彼はどうしても上陸したいという意志を堅持した。その結果、弾丸がジェンソンの肩を貫いたので、ゴボトの人たちは彼が健康状態を回復するまで看護しなければならなかったし、堂々として彼に謝罪を要求した。その理由は、彼がスクナーの中に長いズボンを用意していなかったからだ。最後に、彼が起き上がった最初の日に、ジョーニー・バセットは、親切心を持ってしかし強制的にゲストを手伝って自分の長いズボンをはかせた。これは最も有名な先例となった。年月を経てもこのルールは決して破られることはなかった。白人は長いズボンと分離できない。黒人だけは裸で走る。長いズボンは島における階層を決めた。

II

今晚のことは、ひとつ異例なことで、ほかのどの夜とも全く違うのだ。そこに居た七人は、目がかすかに光って足取りもしっかりしていたが、一日中ウイスキーとカクテルを飲んだあと、食事のために席に着いた。ジャケット、長いズボンと靴をきちんとはいた彼らは：支配人のジェリー・マクマトリー、助手のエディ・リトルとジャック・アンドリュース、蒸気船メリー号のスティプラー船長、テトエト農園の園主ダービー・シュリルトン、セイロンとポーモタスの間で活動している中国血統を半分持つ真珠商人ピーター・ジー、そして、最近蒸気船から降りたばかりの立ち寄り訪問者オールフリッド・ディーコンであった。最初、ワインが黒人のスタッフから提供されて飲んだが、みんなはすぐにハイボールに移った。

彼らがコーヒーを飲んでいる頃に、錨鞘が錨鞘孔を通る時のゴロゴロという音が聞こえた。一隻

の船が着いた合図だ。

「デイヴィッド・グリーンだ」とピーター・ジーが確信を持って言った。

「どうしてわかるんだ？」ディーコンが喧嘩腰で問い詰めた。そして、このハーフの男の洞察力を否定し続けた。「お前みたいな奴ほど、よく素人の前で偉そうなふりをするな。俺は船を操縦したことがある。ただ船のマストがかすんで見えるだけでその船の名を言い当てるわざなんか、錨の音で来る人の名前を呼びあげることなんか—それはな—それはまったくでたらめなことだ」

ピーター・ジーはたばこに火を点けて、応じなかった。

「^{黒人}ニガ^人の連中にはそのように人を驚かすやつがいる」とマクマートリーは巧妙に割り込んだ。

他の人と同じように訪問者の行為は支配人にも不快感を与えた。午後にピーター・ジーが到着した時から、ディーコンは彼に狙いをつける傾向が明らかであった。ディーコンは彼の言うことに対して突っかかり、失礼なことも普通にやった。

「たぶん、ピーターは体の中に半分^{中国人}チンクの血を引いているからだ」とアントリースは自分の仮説を言った。「ディーコンはオーストラリア人だ。分かるだろう、彼らは有色人種をバカにし、見下すのだ」

「俺もそう思う」とマクマートリーは賛同した。「俺たちには人をいじめる行為は許されない。特に、ピーター・ジーみたいな人、あいつは白人より白人だ」

このことについては、支配人は決して間違っていない。ピーター・ジーは性格も頭もいい珍しい人物で、ヨーロッパ人とアジア人のハーフだ。実際、ちょうど中国人の血の中の無感動な性格が、彼のイギリス人の父の体にあった放縦な性格と調和したのだろう。彼はその場にいる誰よりもいい教育を受けたし、いくつかの言語も英語と同じようにうまくしゃべれる。彼は、その紳士の文化の中で育った人たちより紳士の本質を知っていたし、その人たちより紳士的に生きて来た。そして、彼は穏やかな魂を持っている。かつて彼は人を殺したことがあったにもかかわらず、暴力を軽視し、争乱をぞっとするほど嫌っていた。彼はいつも、疫病を避けるようにそういうことを回避した。

スタブリア船長はマクマートリーを助けるため、割って入った。

「俺にはこのような記憶がある。俺がいつもと違うスクナーでオトマンに入った時、^{黒人}ニガ^人たちは、俺が船を操縦していたと予測できた。俺にも予測できないし、まさにそれは‘わざ’だろう。彼らは俺が来たとき他の商人に伝えた。商人たちは望遠鏡で観察したが、その言葉を信じていなかった。しかし^{黒人}ニガ^人たちは知っていたのだ。のちに連中から教えられたことだが、彼らにとってはそのスクナーを操縦している私の影が至る所にあったのだ」

ディーコンは彼を無視して、宝石商人を攻撃し続けた。

「お前は、どうやって錨の音で、何とかという男だとどうして分かるのか？」と彼は挑んだ。

「様々な要因によって、このような判断を下したんだ」とピーター・ジーが答えた。「それはとても説明しにくい。それだけでたいてい一冊の教科書を作れるぞ」

「確かに」とディーコンが冷笑した。「釈明するよりしないほうが容易だな」

「誰かブリッジをしに来ないか？」第二助手のエディ・リトルがディーコンの話を見切ると、期待の目つきで見上げ、カードを切り始めている。「やりたいんじゃないか、ピーター」

「もしやるなら、やつは虚勢を張るぞ。」とディーコンは言い返した。「俺はこのよなたわごと

に飽きたぞ。ジーさんよ、お前は どうやって錨の音だけで来た人が誰かを判断できたかということ

を俺に教えたら、見直してもらえるし、そして、人にもいい印象を与えられるだろう。終わったら俺と一緒にピケットをやろう」

「ブリッジのほうがいい」とピーターは答えた。「船のことは、つまり、こういうことだ：その音だけで横マストがない小さな船と認識できるのだ。笛もサイレンも鳴らなかった、これも小さな船だと判断できるだろう。錨を港の近くに降ろした、これも小さな船だとわかるだろう。蒸気船や大きな船は必ずサンゴ礁の外側に停泊するのだ。航路の入り口は曲がりくねっていて、暗くなると、人員募集船や貿易船など一連の船はあえて通らないのだ。初めて来る船ももちろん通らないだろう、二人を除いてはね。一人目はマーゴンビルだ。しかし、やつはフィジーの高裁で死刑に処された。続いての例外はデイヴィッド・グリーンだ。この男は昼といい、夜といい、天気の状態も問わず、必ずその航路を通るのだ。このことは誰でも知っている。もしグリーンがゴボト以外のどこかにいたとしたら、どこかの命知らずの若い船長が一人いるぐらいだろうが、そういう命知らずの若い船長は俺の知っている限り存在しないし、誰もそういう人を知らないだろう。次に、デイヴィッド・グリーンは近くの海域にいて、グンガ号に乗って巡航している。ここ最近、あの男にはゴボトからカローカロに行く予定がある。一昨日、やつがグンガ号でサンドフライ航路を通った時、俺は話しかけた。やつは、商人を新しい停泊地に上陸させるところだった。バボという所に行ってから、ゴボトに来ると言っていた。時間的に彼がそろそろ着くころだと思っていたところで、錨の音が聞こえた。到着したのはデイヴィッド・グリーン以外誰がいるだろう？ドノバンはグンガ号の船長だ。やつことはよく知っている。あいつの雇い主がそう要求しないかぎり、やつは暗くなったあとは絶対にゴボトに入らないと俺は言い切れる。これから数分後、デイヴィッド・グリーンはあのドアから入って来て「ゴボトの連中はみんな飲んでばかりだな！」と言う。俺は50ポンド賭ける、入ってくるのはやつだ、そして、「ゴボトの連中はみんな飲んでばかりだな！」を言うのだ」

ディーコンの心は一瞬押しつぶされ、頭に不機嫌などす黒い血が昇って来るようだった。

「これでいいだろう。やつは答えただろう」とマクマートリーは笑いながら親切に言った。「支配人としての俺さえもやつが勝つほうに賭けたいよ」

「ブリッジ！だれか手を貸してくれないか？」とエディ・リトルはいらだった声で言った。「ピーター、やろうぜ」

「残りの連中でやれよ」とディーコンが言った。「俺はあいつとピケットをやる」

「俺はブリッジのほうがいいな」とピーター・ジーが控えめに言った。

「ピケットをやらないか？」

真珠商人が頷いた。

「じゃあ、来いよ。俺は錨のことよりピケットのほうが詳しいってことを見せてやるぞ」

「おい、ちょっと…」とマクマートリーが始めた。

「お前はブリッジをしたらいい」とディーコンは彼の話の遮った。「俺たちはピケットをやる」

ピーター・ジーは面白くないと知っていたが、不本意ながら、ピケットをさせられた。

「一巡だけだ [一巡は3ゲーム]」と彼はカードを切りながら言った。

「いくらを賭けたい？」とディーコンが聞いた。

ピーター・ジーは肩をすぼめながら「お好きにどうぞ」と言った。

「百得点で1ゲーム、1ゲームに5ポンドはどうだい？」

ピーター・ジーが同意した。

「リーチ [大負け] の場合は倍の10ポンド？」

「いいだろう」とピーター・ジーが言った。

もう一つのテーブルの4人がブリッジをやっている。ステイプラー船長はトランプをやっていないので、そばで観戦しながら他の人の右手にある長いスコッチグラスにウイスキーを注いだ。マクマートリーは自分の不安を隠しきれなかった。彼はピケットのテーブルの進展に注目し続けた。彼のイギリス人の仲間も同じようにオーストラリア人の行為にショックを受けた。困ることは、ディーコンが何か厄介な行動を取ることだけだ。彼はハーフカースト [ヨーロッパとアジア人の混血] に対する憎みを募らせており、そして、彼がいつ爆発してもおかしくないことだけは明らかだ。

「ピーターが負けてほしいな」とマクマートリーが低い声でつぶやいた。

「それはない、やつにわずかな運さえあれば勝ってしまうな」とアンドリュースが答えた。「俺の経験から言うと、やつはピケットの魔術師だ」

ディーコンの連続した罵り声から察するに、ピーター・ジーは運がよかった。ディーコンは頻繁にグラスに酒を注いだ。彼は第1ゲームに負けた。また、彼の話によると、第2ゲームもリードされている。そのときドアが開き、デイヴィッド・グリーンが入って来た。

「ゴボトの連中はみんな飲んでばかりだな！」と彼は、何気なくその場にいるみんなに言った。そして、支配人と強く握手した。「やあ、マック！あのさあ、おれは船長を捕鯨船に置いてきたぞ。絹製のシャツ、ネクタイ、テニス用の靴は揃ったが、彼に長いズボンを送ってやってほしい。俺のは小さ過ぎだぜ、お前のはちょうどよさそうだ。やあ、エッディ、ヌガリーヌガリーはどうだい？ジョック、起きているか？何か奇跡的だな。熱病で倒れた者も、酔いつぶれた者もないな」と彼はため息をもらした。「時間がまた早いのか。よお、ピーター！あの日お前は俺と離れて一時間後に大きな嵐に遭っただろ？俺らは二つ目の錨を下ろさないといけなかったぞ」

マクマートリーが彼をディーコンに紹介をし、召使を使って長いズボンを船長に持っていかせた。それでドノバン船長は、入って来た時には白人としてあるべき姿となった一少なくともゴボトの白人となった。

ディーコンは第2ゲームも負けた。彼は爆発寸前だった。ピーター・ジーはたばこに火を点けることに没頭し、沈黙し続けている。

「何？—お前は勝ったからってもうやめるのか？」ディーコンが詰問した。

グリーンは眉を吊り上げ、マクマートリーに問うような表情を見せた。マクマートリーも眉をひそめた、嫌悪な表情をした。

「一巡が終わったぞ。[2ゲーム先取ということ]」とピーターが答えた。

「一巡は3ゲームだぜ。俺の番だよ、やるぞ！」

ピーター・ジーは黙って従った、第3ゲームが始まった。

「ガキ犬め、あいつには獣のように首輪をつけるべきだな」とマクマートリーがグリーンにつぶやいた。「もう、やめようぜ。俺はやつに目を光らしたい。もしやつがやりすぎたら、ビーチに放り出すぞ。会社の指示なんかもうどうでもいい」

「あいつは誰だ？」とグリーンが聞いた。

「最近の嵐の中を来た蒸気船の生き残りのやつだ、会社はあいつによくしろと言う。やつは投資する農園を探している。会社に10,000ポンドを融資した。あいつの頭の中には‘すべて白人のオーストラリア’ばかりだ。そう考える理由は、肌の色が白だし、やつの父親は連邦政府の検事総長であったからだ。それで、こんなバカなことができるのだ。だからやつはピーターだけをいじめるんだ。しかし、おわかりのように、ピーターは、この世の中でトラブルを起こす、あるいは、トラブルを招く、というようなことから一番縁遠い人間だ。会社なんてくそったれだ。俺は銀行の口座のために、乳母が赤ちゃんにするように一から十までやるわけではなかった。グリーン、飲んで、グラスをいっぱいにしようぜ。あいつは嫌いなやつ、災厄なやつだ」

「もしかしたら未熟なだけかもしれない」とグリーンは自分の考えを言った。

「やつは自分が飲む量をコントロールできない—それは明らかだ」と支配人の怒っている視線が嫌悪と怒りの気持ちを込めて、ディーコンを見つめた。「もしやつがピーターに手を出したら、おれは必ず自分であいつを殴ってやる。あのごろつきめ」

宝石商人は得点を記録する板から釘を抜いて、椅子に寄り掛かった。彼は第3ゲームも勝った。そして、エディ・リトルのほうをちらっと見た。

「俺はブリッジをやる準備ができたぞ」

「俺は中途半端な人間じゃない」とディーコンが怒鳴った。

「うん、そうか、俺はそのゲームに疲れた」とピーターは、いつものように自信たっぷりの口調で冷静に言った。

「やろうぜ、続けよう」とディーコンは粘った。

「あと1ゲームやろう、俺の金をそのように持っていてはいかんぞ。この1ゲームに15ポンドを賭ける、2倍になるか引き分けになるか勝負しよう」

マクマートリーは割って入ろうとしたが、グリーンは目線で彼を止めた。

「このゲームが本当の最後であればいいだろう」とピーターが言った。そしてトランプを拾い集めた。「今回は俺の番だろう。分かっているぞ、この最後のゲームに15ポンドを賭けるということは、俺が30ポンド勝つか、それとも引き分けるかということだろう」

「その通りだ、この野郎。引き分けるか、それともお前に30ポンドを払うかということだ」

「えっ、血を見るかな？」と言いながらグリーンが椅子を前に引いた。

他の人たちも立ったり座ったりしてテーブルに集まって来た。運は依然としてディーコンに巡ってこなかった。彼は明らかにトランプの遊び方が上手だが、トランプは彼にそむくようだ。運が悪いことを冷静に受け入れられることができないのも明らかだ。彼は、高い声で汚い言葉をたれ流し、冷静かつ沈着なハーフに罵りや怒りを浴びせた。最後に、ピーター・ジーは自分の得点を数えた、ディーコンの得点は50にも及ばなかった。ディーコンは虎視眈々とライバルを見ていて、しかし、言葉は何も出てこなかった。

「バカみたいだ」とグリーンが言った。

「今回は2倍だぞ」とピーター・ジーが言った。

「お前から教わる必要はない」とディーコンが怒鳴った。「ちゃんと算数を勉強したんだ。お前に45ポンドを負けただろう。これ、持っていけ！」

侮辱的なやり方で9枚の5ポンド紙幣をテーブルに投げつけた。ピーター・ジーはもっと冷静になり、怒った表情を全く見せなかった。

「お前は、頭が悪いけど運だけがいいな。お前は実際にはトランプができないのだろう。俺はお前に色々教えてやる」とディーコンが言い続けた。「お前にトランプのことを教えてやる」

ハーフの男は許す態度で笑いながらうなずいて、お金を畳んだ。

「カシノと言う小さなゲームがある—もしお前が聞いた事があったら嬉しいけど—子供のゲームだぞ」

「俺は他の人が遊ぶの見たことがある」とハーフの男は低くて穏やかな声で言った。

「何だそれ」とディーコンが怒鳴った。「もしかしてお前がうまく遊べると思っているのか？」

「いいや、そうでもない、少し見ただけ。そのゲームが俺はあまり得意じゃない」

「カシノは勢いで人を騙すゲームだ」とグリーンは笑顔で話に割って入った。「俺はそのゲームが大好きだ」

ディーコンは彼の話を見殺しにした。

「1ゲームに10ポンドで -31得点でやろう」とディーコンはピーター・ジーに挑んだ。「それで、お前がカードについてどれだけ無知であるかを見せてやるぞ。来いよ、テーブルはどこだ」

「いいや、結構」とハーフは返答した。「彼らは俺のことを待っている。一緒にブリッジをやると決まっているんだ」

「そうだ、やろうぜ」とエディ・リトルは熱心に願った。「来いよ、ピーター、始めよう。」

「カシノみたいな小さなゲームを怖がっているのか」とディーコンが身構えた。「もしかしたら賭ける金額が高すぎるのかな。じゃ、何ペンスかではどう？—ファーマーリング銅貨とかでもいいぞ。お前がやると言うならな」

その場にいるすべての人はこの男の失礼な行為に傷つけられた。マクマートリーはもう我慢出来ない。

「ちょっと待て、ディーコン。あいつはやりたくないと言っただろう。やつはほおっておけ」

ディーコンの怒りは支配人に移った。しかし、グリーンは彼の怒鳴り声上がる前に声をかけた。

「俺はお前とカシノをやりたい」と彼が言った。

「お前は何を知っているんだ？」

「あまり多くはないけど、勉強したい」

「でもさあ、今晚は少々の金じゃ教えないぞ」

「なるほど、それは構わない」とグリーンが回答した。「俺はいくらでも出す—もちろん無理のない範囲でだけだな」

ディーコンはこの乱入者に致命的な一撃を与えようとした。

「俺のゲームには100ポンドを賭ける。お前がその金額がいいと言うならな。」

グリーンは満面の笑みで自分の愉快的な気持ちを表した。「そのぐらいいいだろう、始めよう、カードをチェックしないかい？」

ディーコンは驚いた。彼は、ゴボトにこの条件に耐える商人がいるとは思っても寄らなかったのだ。

「カードをチェックしないのかい？」とグリーンがもう一回言った。

アンドリュースは新しいトランプを持って来た。その中からジョーカー2枚を抜いた。

「もちろんしない」とディーコンが答えた。「それは意気地なしだぞ」

「それは同感だな。俺も意気地なしは好きじゃない」とグリーンが同じように言った。

「えー、お前も好きじゃないの？ それじゃあ、俺らが何をするのかを教えてやる。俺らのゲームは500ポンドにするぞ」

ディーコンは再び驚いた。

「俺はいいと思う」とグリーンが言った。そして、トランプを切り始めた。「もちろん、カードを多く取ったほうが3ポイント、取ったカードの中にスペードが多いほうが1ポイント、次は、ビッグカシノは2ポイントで、リトルカシノは1ポイント、エースは特別扱いでブリッジのように各1ポイント。これでいいか？」

「お前はよく冗談を言うな」とディーコンが笑った。笑う声の中に緊張が感じられる。「お前がお金を持っていることが俺にはどうやってわかるんだい」

「俺にどうやってお前がお金を持っていることがわかるのかということと同じだよ。マック、俺のこの会社での信用はどうだい？」

「あなたなら、いくらでもいいよ」と支配人が答えた。

「お前は個人を保証するのか？」とディーコンが要求した。

「その通りだ」とマクマートリーが言った。「小切手のことを言うなら、やつの会社での信用はお前よりずっと高いぞ」

切り終わったカードをディーコンの前に置いて「先に配ってくれ」とグリーンが言った。

後者は躊躇しながら、カードの真ん中を切った。そして、ブツブツ言いながら、不安な顔で周りを見た。助手と船長が頷いた。

「俺にとって、お前らは全員顔も知らぬ人間だ」とディーコンが文句を言った。「その紙に書いた金額が本当に存在するのか、俺にはどうやって分かるんだ？」

その時、ピーター・ジーはこのような行動を取った。彼は、ポケットの中から財布を取り出し、そして、マクマートリーから万年筆を借りて書き始めたのだ。

「俺はまだ真珠を購入しに行っていないので、口座の預金はそのまま残っている。グリーン、その金を裏書譲渡しよう。金額は15,000ポンド。これ、これを見て」とハーフの男が説明した。

小切手がテーブルの上を通る時、ディーコンがそれをさえぎってしっかりと読んだ。そして、頭を上げてマクマートリーを見た。

「本物か？」

「ああ、お前のと一緒、しかもお前のよりいいぞ、この会社の小切手は全ていいものだ」

ディーコンはカードを切って先にカードを配る権利を得て、そして、徹底的にカードを切った。しかし、いくら切っても幸運は彼に巡って来ない。彼は第1ゲームに負けた。

「続けよう」と彼が言った。「さっき、俺たちはなんゲームやると言い合わせなかったから、お前が勝って辞めたらいかん。俺はもっとやりたい」

相手がカードを切るためにグリーンはカードを混ぜて渡した。

「今回のゲームは1,000ポンドでやろう」とディーコンは、第2ゲームに負けた時に言った。そして、今の1,000ポンドを先の二つの500ポンドと同じように失った時、彼は2,000ポンドでゲームをしようと言い出した。

「それは連続加倍だぞ」とマクマートリーが警告した。ディーコンは睨んだ目で彼を見返した。しかし、支配人は言い続けた。「そのやり方に従う必要はない、グリーン、お前は阿呆じゃないだろう」

「誰がゲームをやっていると思っているんだ？」とディーコンが支配人に怒鳴った。そして、グリーンに向かって「俺はお前に2,000ポンド負けた。次のゲームは2,000ポンドでやろう」と言った。

グリーンは額き第4ゲームを始めた。そして、ディーコンが勝った。それは明らかに不公平な賭け方であることはその場にいる誰にでも分かっていた。前の3ゲームに負けても、第4ゲームにだけ勝てば、ディーコンにはお金の損失がない。まるで子供のやり方で、ずっと負けた総額で賭けるとすると、いくら負けても、ただ最後のゲームだけ勝てば振り出しに戻れるわけだ。

ディーコンは言わなくてもわかるようにゲームをやめようとした。しかし、カードを切るためグリーンはディーコンにカードを渡した。

「何？」とディーコンが叫んだ。「まだやりたいの？」

「勝負はまだ決まっていなだらう」とグリーンはいぶかしげにささやきながらカードを配り始めた。「思うけど、また1ゲームに500ポンドで始まるのか？」

自分のしたことに対するディーコンの羞恥心が彼の心を痛めた。なので、彼はこう答えた。「いいや、次のゲームは1,000ポンドでやる。なあ、31ポイントで1ゲームは長すぎないか。もしお前が速すぎると思わなければ21ポイントでどうだ？」

「よくできたじゃないか！速くて小さなゲームだ」とグリーンが賛成した。

ディーコンはまた先のようなやり方を繰り返した。彼は2ゲームを負けて、賭ける金額を2倍にして、そして、振り出しに戻る。しかし、グリーンには忍耐力がある。それから1時間のうちに同じことを何回も繰り返した。そしてついに、彼が待っていた時が来た。ディーコンの一連の負ける回数が多くなっている中で、ディーコンは再びかける金額を倍にして、4,000ポンド負けた。さらに倍にして8,000ポンド負け、かける金額をまたさらに倍にと言い出した時だった。

グリーンが頭を振った。「お前は知っているだろう、その金額は賭けられないぞ。お前は会社に10,000ポンドしか融資していないぞ」

「お前は俺とやらないのか？」とディーコンがしわがれ声で聞いた。「俺の8,000ポンドを勝ち取ってゲームをやめるという意味なのか？」

グリーンが笑いながら頭を振った。

「それは強奪だ、明白な強奪だ」とディーコンは言い続けた。「お前は俺の金を勝ち取ったあとは、俺ともうゲームをやらないつもりか？」

「いいや、お前は勘違いしてるぞ。俺は変わりなくお前とゲームを続けたい。しかし、お前はもう2,000ポンドしか持ってないだらう。2,000ポンドしか賭けられないぞ」

「よし、分かった、じゃ、それでやろう」とディーコンは彼の話を遮った。「お前が切れ」

このゲームはより静かに行われた。残ったのはディーコンの罵りと呪う声だけだ。傍観者も黙々と、満たした長いスコッチグラスから少しずつ飲んでいった。グリーンは相手の爆発を無視して、ゲームに集中した。彼は真面目にゲームをしていて、テーブルにある52枚のカードの進み方に注目し続けている。カードの3分の2を配った所で、グリーンもすでに勝負を決めて、手元のカードをテーブルに投げた。

「カードの神が微笑んだな」と彼は言った。「もう27ポイントだ」

「間違いじゃねえか？」とディーコンは顔を真っ青にしながら、脅かすように言った。

「そうであれば俺の負けだ、数えてくれ」とグリーンが自分のカードを彼に渡した。ディーコンはカードを受け取って震える手で確かめた。彼は自分の椅子を半分後ろに押して、スペースを空けて、グラスの中に残ったお酒を一気に飲んだ。見回すと、同情心のない冷淡な顔ばかりだった。

「俺は次の汽船に乗ってシドニーに帰らなければならないと思う」とディーコンが言った。これは彼が初めて荒れていない穏やかな声で言った言葉だった。

あとでグリーンは彼らにこう言った。「もしやつがすすり泣いたり、うなったりしたら、やつに最後のチャンスを与えなかった。やつは男らしく教訓を受け入れたので、俺はチャンスを与えざるを得なかった」

ディーコンは自分の腕時計を見てあくびをしながら疲れたことを装って立ち上がった。

「待て」とグリーンが言った。「お前の将来を賭けるか？」

言われたディーコンが椅子に腰を下ろして何かを言おうとしたが、何も言えなくてただ自分の唇を舐めて頷いた。

「ドノバン船長は夜明けになるとグンガ号に乗ってここから出発してカロ・カロに行く」グリーンは全く関係のない話をし始めた。「カロ・カロは海の真ん中にあるリング状の砂島で、およそ1,000本のヤシの樹がある。そこにタコノキも生えている。しかし、サツマイモやタロイモは成長できない。そこに800人の先住民がいて、王様1人と大臣が2人いる。後者の3人は島にいる人間の中で服を着る唯一の人たちだ。その島は神様に見捨てられた小さな場所で、俺は年に一回ゴボトからその島に船を送っている。島の飲料水にも塩分が含まれている。それでも、歳になったトム・バトラーはその島に12年も生きていた。あの男はそこに居る唯一の白人だ。彼は5人のサンタ・クルーズ出身の船員を擁していたが、かつてあいつらはできるかぎりトムから逃げようとしたり、彼を殺そうとしたりした。そういうわけでやつらはそこに送られたのだ。そこに居ればやつらは逃げられない。農園に何か難しいことがあったら、いつも彼が解決した。そこには伝道師がいない。彼らが島に着く何年か前に、2人のソロモンから来た伝道師が砂浜の上で棍棒で殴り殺されたんだ」

「お前は、それがいったいどうしたのかと当然思っているだろう。でももう少し我慢して聞いてくれ。俺が言ったように、ドノバン船長がカロ・カロに行く毎年の恒例の旅は今夜の夜明けとなる。トム・バトラーも歳なので、役に立たなくなっている。俺はあの男をオーストラリアに送還しようとしたが、彼は、カローカロに残ってそこで死にたいと言い出した。来年ぐらいに言う通りになりそうだ。あの男は変人で偏屈者だ。俺は、白人の誰かを島に送ってやつの手から仕事を取り上げる時が来たと考えている。お前はその仕事をどう思う？ やりたいかどうか俺は知りたい。やるならそこに2年も滞在しなければならないけどな」

「待て！ 話はまだ終わってない。あんたは今晚ちよいちょい賭事を呼び掛けた。汗をかいたこともないあんたは賭ける資格はないぞ。俺に負けた金はあんたの父親や他の親戚の汗で稼いだ金だろう。しかし、商人としてカロ・カロで2年働いたらそれは別の意味になる。俺は勝ち取った10,000ポンドをあんたの2年の時間に賭ける。あんたが勝ったらその金は元に戻ってあんたのものとなる。もし負けたら、あんたは夜明けになったらここから出てカロ・カロに行って仕事をしなければならないのだ。今やっとなんか賭事と言えようになる。やるのか？」

ディーコンは言葉が喉に引っかかって、もう喋れない。頷いてカードに手を伸ばした。

「もう一つ」とグリーンフが言った。「俺はもっといいことができる。あんたが負けたら、あんたの2年は俺のものとなる—当然給料はない。それでも、俺は給料を払う。もし俺があんたの仕事に納得できたら、そしてもしあんたが全ての指示とルールを守ったら、俺はあんたに2年間、1年に5,000ポンドをやる。そのお金を会社に預けて2年が終わったら利子とともにやる。これでいいか？」

「多すぎる」とディーコンがどもった。「あなたは自分に不公平です。一人の商人の1ヶ月の給料は10から15ポンドしかありません」

「それは構わない、ゲームに集中しよう」とグリーンフがその話は却下だと言うような感じで言った。「始める前に、俺はいくつかのルールを書き留める。2年間あんたは必ず毎朝にそのルールを大声で繰り返すのだ—もしあんたが負けたらね。それはあんたの魂にいい影響を与えられるはずだ。大声で繰り返し、730回の朝を経たらそのルールは頭の中に留まると俺は思う。ペンを貸してくれ、マック。見てみよう」

彼は数分間かけて、着実かつ迅速に書いた。そして、書いた内容を読み上げた。

「私が必ず覚えなといけないこと。人はみんな同じぐらい善良だ、人が自分自身のことを優れていると考えていない限りは」

「どのぐらいお酒を飲んでも、紳士であることを忘れてはいけない。紳士というのは温和な人のことだ。注釈：お酒を飲まない方がもっといいが」

「男と男がゲームをやる時、必ず男らしくやる」

「ほどほどの罵りは正しい使い方ですれば効果的なものだ。あまりにも多くなると罵りは台無しになる。注釈：罵りはカードを変えないし、風向きも変えない」

「男らしくない男には、男という免許を出さない。10,000ポンドを使ってもそのような免許は買えない」

読み始める時、ディーコンの顔が怒っているように見え、すぐに真っ青になった。読み終わるまでの間、ゆっくりと不機嫌な赤色がさらに濃くなって、首から額まで昇っていった。

「はい、これまで」とグリーンフが言った。そして、その紙を折ってテーブルの真ん中に投げた。「それでもゲームをやりたいのか？」

「僕は自業自得です」ディーコンは途切れがちの声で呟いた。

「僕はおろかなロバでした。ジーさん、次のゲームに勝つか負けるかが分かる前に、あなたに謝りたいです。わかりません。ウイスキーのせいかもしれませんが、僕は愚か者です、ごろつきです、無頼漢です—全て悪いものです」

彼は手を差し出した、ハーフは陽気に彼の手を握った。

「グリーフ、僕の考えでは」とハーフは口走った。「この子はもう大丈夫になった。全てをやめて、最後の寝酒で今晚のことを忘れましょう」

グリーフはハーフと討論をするようなしぐさを見せたが、ディーコンは大声で言った。

「いいや、僕はその好意をいただけなのです。僕は中途半端なくじなしではないです。僕の運命はカロ・カロであれば、カロ・カロに行くべきです。それ以上の解決方法はない」

「いいじゃん。」とグリーフが言いながらカードを切り始めた。「やつがカロ・カロに行くような正しい人であれば、カロ・カロはやつにとって何も悪いことはないです」

今回のゲームは得点はかなり近いものの、勝負を決めにくかった。カードを三回回しても、二人は引き分けとなって、誰も勝っていない。第5巡目が始まった。最後のところまで来ると、ディーコンは3ポイントがあれば勝ち抜け、グリーフは4ポイントを必要するところとなった。カードは依然としてディーコンに背くようだ、彼はどうしてもカードの枚数を稼ぎたかった。ディーコンはもうのしりを呟いていないし、呪わなかった。そのゲームは彼がその晩で一番上手にやったゲームだった。ちなみに、彼には2枚の黒いエースとハートのエースが手に入った。

「僕の所持している4枚のカードは何かをあなたはすべて分かっていると思います」とディーコンが自分の最後の4枚のカードを拾った後に挑んだ。」

グリーフが頷いた。

「じゃ、当ててみてください」

「スペードのジャック、スペード2 [リトルカシノ]、ハート3、そして、ダイヤのエース」とグリーフが答えた。

ディーコンの後ろにいた人が彼のカードを覗いてみた。グリーフの判断はぴったり当たっていた。

「カシノに関しては、あなたが僕より上手だ」とディーコンが認めた。

「僕はあなたの4枚カードのうち3枚が分かっています。ジャックとエースとビッグカシノです」

「違うぞ。一つのトランプゲームには5枚のエースは存在しない。お前はエース1枚を持っているし、3枚ゲットしただろう」

「確かに、あなたのほうが正しいです」とディーコンが認めた。「僕はエースを3枚もうゲットしている。あなたが持っているカードを全部頂こう、これは今僕がしないといけないことです」

「リトルカシノをセーブしてあげる」とグリーフは動きを止めて計算した。「そう、エースも。おれはカードの枚数を稼ごう、そして、ビッグカシノを頂こう。それでやろう」

「もうカードがない、ぼくが勝った」とディーコンは最後のカードを出して大喜びだった。「僕はリトルカシノとエースが4枚で勝ち抜ける。あなたはビッグカシノの2ポイントとスペードの1ポイントをプラスしても20ポイントしかない」

グリーフが頭を振った。「残念だがお前はどこかで間違っただろう」

「いいや」とディーコンが積極的に言った。「僕はゲットしたカードをしっかりと確認した。少なくともこの一つは確信できる。僕はカード26枚をゲットした、あなたも26枚だ」

「もう一回数えろ。」とグリーフが言った。

ディーコンは真面目にゆっくり、震える手で、自分がゲットしたカードを数えた。25枚しかなかった。彼はテーブルの隅に手を伸ばして、そこにあるグリーフが書いたルールの紙をポケットに

入れた。ドノバン船長は自分の腕時計を見て、あくびをしながら立ち上った。

「船長、もう船に行きますか」とディーコンが聞いた。

「そうだな」と船長が答えた。「どんなタイミングでお前を迎えに来ればいいのか？」

「今、一緒に行きます、まず途中でビリ号から僕の荷物を取りに行きましょう。今朝はそれに乗ってバボに行くつもりでした」

ディーコンはそこにいたすべての人と握手をして、みんなはカロ・カロでの幸運を祈って乾杯した。

「トム・バトラーはトランプをやりますか？」と彼はグリーンに聞いた。

「1人でやるゲームなら」と答えた。

「僕は2人でやるゲームをあの男に教える」と言ってディーコンはドアの方に向かった。そこにドノバン船長が待っていた。最後に、ディーコンがため息をつきながら言った。「もし僕が今晚ここでのやり方であの男とやるなら、やつは僕の皮を剥ぐかもしれない」

参考文献

Jack London(1912). "A Goboto Night" *A Son of the Sun*. New York: Doubleday, Page & Company.